



人生の目的

平岡修治



Shuji Hiraoka

株式会社 プレイズ

人生の目的

平岡修治



Shuji Hiraoka

Illustrated by Osamu Takimoto

一通の手紙

何年も前になりますが、一人の学生から一通の手紙をいただいたことがあります。

「僕は孤独です。家にいても、学校にいても、いつも自分のまわりには誰かがいるし、その人たちと話もします。無駄話もしますが、時には勉強のこと、趣味のこと、将来のことについても話をしています。仲間とスポーツもやるし、面白い話題が出たときには笑いこけることもあります。けれど、いくら自分のそばにたくさん的人がいても、その人たちと話をしても、なんとなく不安なのです。人間は、結局のところひとりぼっちだと思うと、たまらなくなるのです」。



確かに、私たちのまわりには友達もいるし
家族もいます。環境は、孤独であるはずがな
い。なのに、自分という人間が、社会という雑
踏の中でもまれ、流されてしまいそうになるとき、
恐れが心を支配していきます。将来のことを
考えると、不安でたまらなくなります。そんな「心
の孤独感」は、年齢や環境に関係なく誰に

でもあります。その不安が、時々心を刺しつらぬき、その傷ついた痛々しい心を理解してくれる人を捜し求めます。時には、家族に、友人やガールフレンドに答えを求めることもあります。SNSやスマホゲームで、まだ会ったことのない人に向かうこともあります。しかし、心のいやしと投げ所を求めたはずの人間関係で、かえってズタズタに傷つくこともあります。そんな経験をしたことはありませんか。

でも、それは仕方のないことです。なぜなら、私たちは自分のことで悩み、苦しんでいるように、私たちのまわりの人も、自分が生きていくことで精一杯なのです。映画や漫画の主人公のように、すべてを解決してくれる頼りがいのあるスーパースターなど、どこにもいないのが現実です。人は弱さを持ち続けながら、歩み続けているのです。

私たちは誰かに頼らずには生きていけません。お互いに頼りながら生きています。そして、それが期待外れだったり、裏切られたりして傷つくことも多くあります。解決の出口が見つ



からないときは、いったい自分の生きる目的は
何だろうと考えます。

人生の目的を問うということは、人間だけに
与えられた能力であるというより、むしろ人間だ
けに負わされた使命だと思います。

世界中で起きている戦争や紛争、飢餓問

題、自然災害、身近な人の事故や病気など、社会的・世界的な事件から、日常身の出来事に至るまで、私たちの周囲には、「何故こんなことがおきるのか?」という疑問を抱かせる材料で満ちあふれています。

それらの一つひとつの問題を自問しながら、多くの出来事の波にもまれて、私たちは生きています。これらに対して、あるときは両親が、あるときは友人が、あるときは先生が、そしてあるときは専門家が教えてくれます。また、あるときは新聞やテレビのコメンテーターの説明で、なんとなく納得したような気持ちになります。日常生活における問いには、これらの答えで一応解消するものもあるでしょう。

人間とは何だろう

ところが、たった一つ、いかなる人も答えてくれない問いがあります。「人とは何だろう」「生きるとはどういうことなのか」「何のために生きているのだろうか」という、人間の問いです。

歴史を学んでも、社会を眺めても、自分とい



う存在を見つめても、人間ほど不思議なもの
はないように思えます。私たちは、人間の美し
い行為や優しさに心を打たれ、人間の素晴
らしい知恵に感動し、涙を流すこともあります。
しかしその一方で、人間の醜さや無力さ、卑
劣さに直面し、ため息をつくこともあります。自
分の欲望のために、他人を食い物にするよう

な人もいます。このような人間が集まって織りなす横糸が社会であり、縦糸が歴史だと思っています。そこには驚くべき文化の発達があり、同時に、恐るべき人間性の粗野や不条理、差別、残酷さがあります。

存在の目的

そんな中で、私たちは問いかけ続けます。
「私が生きる目的とはいったいなんだろう」と。

私たちの身のまわりのものを眺めると、どんなものにも存在の目的があります。テレビは情報源として、また娯楽のためにありますし、椅子は座るため、鉛筆やペンは書くために、車は移動手段として、照明は部屋を明るくしてくれますし、パソコンはその限界を見極めることが難しいくらい、さまざまな働きをしてくれます。

すべてのものには存在する目的があります。
なのに、人間は何のために存在しているのか、その目的がわからない、わからないままで生きています。

朝起きてから、夜ベッドに横たわるまで、私たちの日常は、いろいろな行動の連続です。それらを部分的に見れば、いかにもはっきりした目的や秩序があるように思えます。しかし、一貫して、そして全体的に見ると、いったい人間は何を追いか求め、何に駆り立てられて生きているのかわからなくなります。その「何か」を考えてみる余裕さえなく生きています。そして気がつけば、「死」という人生の終焉^{しゅうえん}を意識するようになります。

私たちの周囲にあるテレビ、椅子、ペンや車などのさまざまな“モノ”について断言できるのは、「存在の目的や意味がある」ということです。それは、一言で言うなら、人間のために存在しています。人間が作ったのですから、人間のために存在するのは当然のことです。ですから人間のために作られたものは、作った人間の手に握られたときに初めて、存在する価値があります。時計を犬に与えても何の意味もありません。車を猫に与えても無意味です。



「私たちを造られたのは神だ」と、聖書ははっきりと語ります。その神に握られたとき、言い方を変えるなら、その方に出会い、その方を知ったとき、人間の存在する目的がはっきり見えてきます。神様に会うことによって、今まで多くの人々が生きる目的を見いだしてきました。聖書は語っています。

聖書が説く「神」とは

『人は、たとひ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありましよう。』 ルカの福音書9章25節

『しかし、どうしても必要なことはわずかで
す。いや、一つだけです。』

ルカの福音書10章42節

では聖書が言う神とは、具体的にどんな神なのでしょうか。聖書は、「神とは全世界の造り主で、私たちを愛しておられる方」と語ります。その神とは、人間「が」造った神ではなく、人間「を」造った神です。「が」と「を」の違いです。人間は人形を作ることができますが、人形が人間を作ることはできません。お母さんが赤ちゃんを産みます。赤ちゃんがお母さんを産むことは絶対できません。日本には人間の考えや人の手によって造られた神がたくさんあります。神道では八百万やおよろずの神と呼ばれるほど、日本には数え切れない神々があります。まことの神は唯一であり、創造主として聖書に登場します。



『初めに、神が天と地を創造した。』

創世記1章1節

私たちの住んでいる地球は、自転しながら太陽のまわりを公転している、太陽系に属する惑星の一つです。公転速度は毎秒約30キロ、時速にすると10万7208キロ、マッハ88と



いう超高速、戦闘機の100倍もの速さです。そして3億キロの旅を1年（365日）かけて回ってきます。自転速度は毎秒400m、新幹線の5.7倍の速度です。地球が所属する太陽系は、銀河系にあります。太陽は、地球を含め、他の惑星や小惑星を引き連れて、1秒間に270キロという、これまた超高速で銀河系の

中心に対して公転しています。銀河系もまた、秒速600キロの速さで宇宙を旅しています。これらの公転速度も自転速度も、狂うことなく正確に動いています。動力源は神様です。そして、そのまことの神が、正確に全世界をコントロールしているのです。

人間の体も、宇宙のように正確にできています。神様の造られた目は、どんなレンズよりも優れています。複眼で物体を立体的にとらえ、ひずみはありません。しかも、完璧なカラーです。耳もまた、20ヘルツから2万ヘルツの音、約10オクターブの音を、2つの耳で立体的に聞くことができます。さらに耳から脳には、2万4千本の神経の糸が組み込まれ、耳は脳に電気信号を送っています。ですから、実際に音を聞くのは脳だと言われています。その脳もまた実に素晴らしく、過去の記録を瞬間的に取り出すことができます。しかも、動く映像付きです。脳は生命の維持、運動、感覚、知的活動、食欲、呼吸、感情など、数えきれないほど多くの働きを受け持っています。その保護のた



め、頭蓋骨で完全に守られています。心臓もシンプルですが重要な働きをしています。いわゆるポンプの働きです。体の隅々に、血液を循環させて酸素と栄養を運んでいます。同時に、老廃物の回収も担っています。心臓から出ていった血液が心臓に戻る時間は、人によって差はありますが、約30秒です。さらに、

人間一人の血管の長さは、目に見えない毛細血管を含めると、地球2周半とされています。これだけでも、人間はいかに精密に造られているのかがわかります。

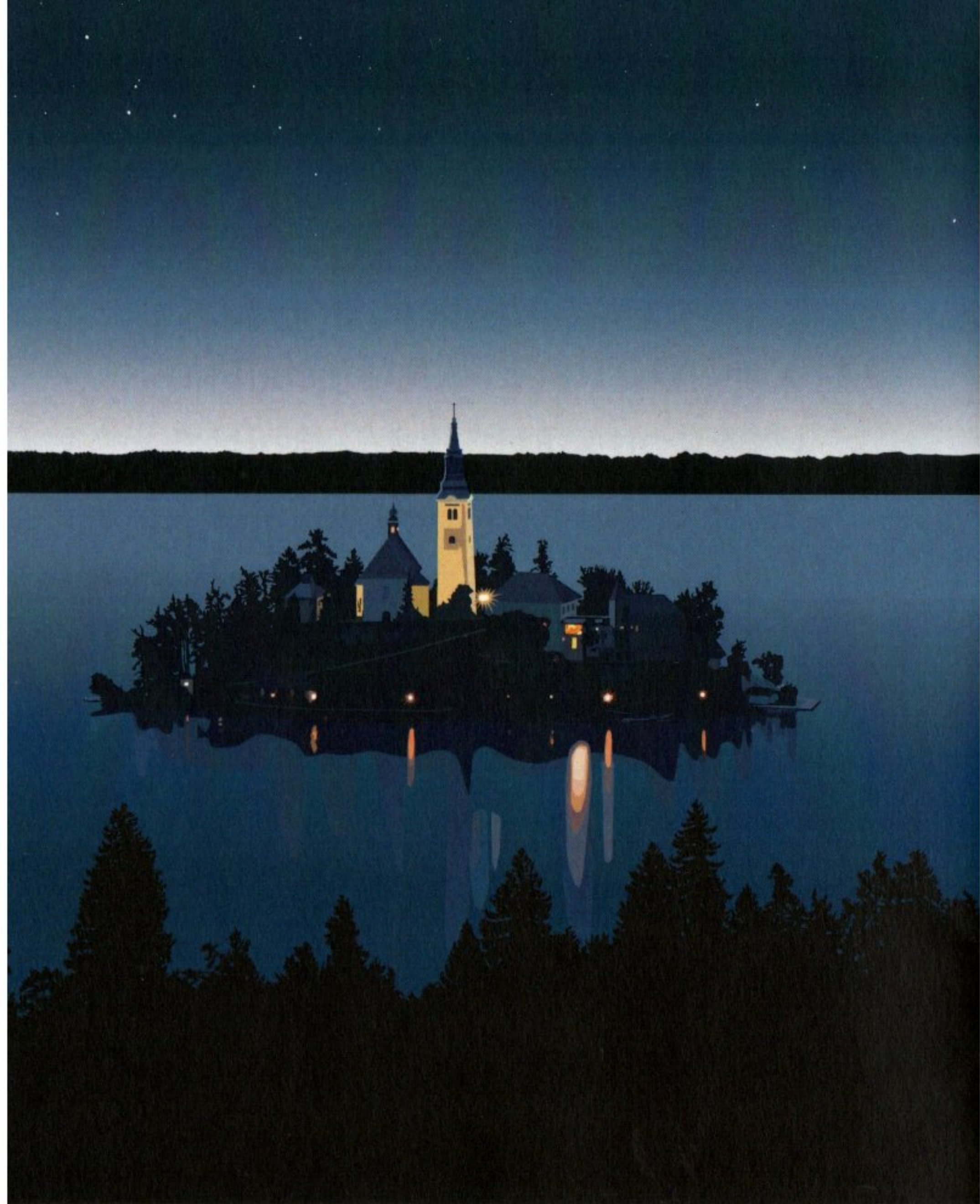
捜してくださる神

どうしたら、聖書が示す神に出会うことができるのでしょうか。

以前、繁華街の雑踏の中で、5歳ぐらいの子どもが大声で泣いているのを見つけました。「ママー、ママー」と、ありったけの声を出して必死に叫んでいました。私はそばに駆け寄りなだめましたが、いっこうに泣きやみません。私はその子を私の肩に乗せ、「迷子です。お母さんいませんか～」と必死に叫びました。歩きまわるとわからなくなるので、その場で叫び続けました。5分ぐらい叫んだと思います。そのとき、お母さんが泣きながら駆け寄ってくる姿が、私の目に飛び込んできました。その途端、子どもは泣きやんだのです。迷子が親を捜すのは至難の業です。親が子を捜すほうが簡単です。

イエス・キリストは2000年前、神の子として人類に遣わされました。人間の力では、とうてい神を見つけることができません。神のほうで近づいてくださったのです。それがクリスマスの出来事です。

聖書に、失われた羊のたとえ話が出てきます。100匹の羊を持っている羊飼いが、一匹を見失った話です。その人は必死に捜し、迷っていた羊を捜し当てます。この話のポイントは、必死に捜しているのは羊ではなく羊飼い、ということです。特別価値のある羊、優秀だから捜したわけではありません。羊飼いは、何の条件もつけず羊を捜し求めます。このたとえ話で、羊飼いは神を意味し、羊は人間を表しています。捜すのは神、迷い出たのは人間、という設定です。人間が神を捜すのが宗教です。しかし、人間の力で神に到達することはできません。神が近づき、神が人間を捜し求めてくださいます。私たち人間は、見つける側ではなく、見つけられる側に立っているのです。そして、見つけるまで捜す方、それがイエス・キリストです。



『人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。』ルカの福音書19章10節

本当の愛

イエス・キリストが、神の子としての働きをスタートしたのは、30歳のときでした。わずか3年半の宣教の末、十字架にかけられました。そ

の理由を、聖書は、「全人類の罪の身代わりとなるため」と語っています。そこに、本当の愛が表されたのです。

愛することの究極の証明は、相手のために死ぬことができるということです。お母さんが、自分の子どものためだったら死ぬる、それが母の愛です。しかし、人間の愛には限界があります。自分の子のためには死ぬことができますが、他人の子のためには難しいかもしれません。イエス・キリストは、すべての人類のために十字架にかかられました。そこには、どんな差別もありません。

『天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。』

マタイの福音書5章45節

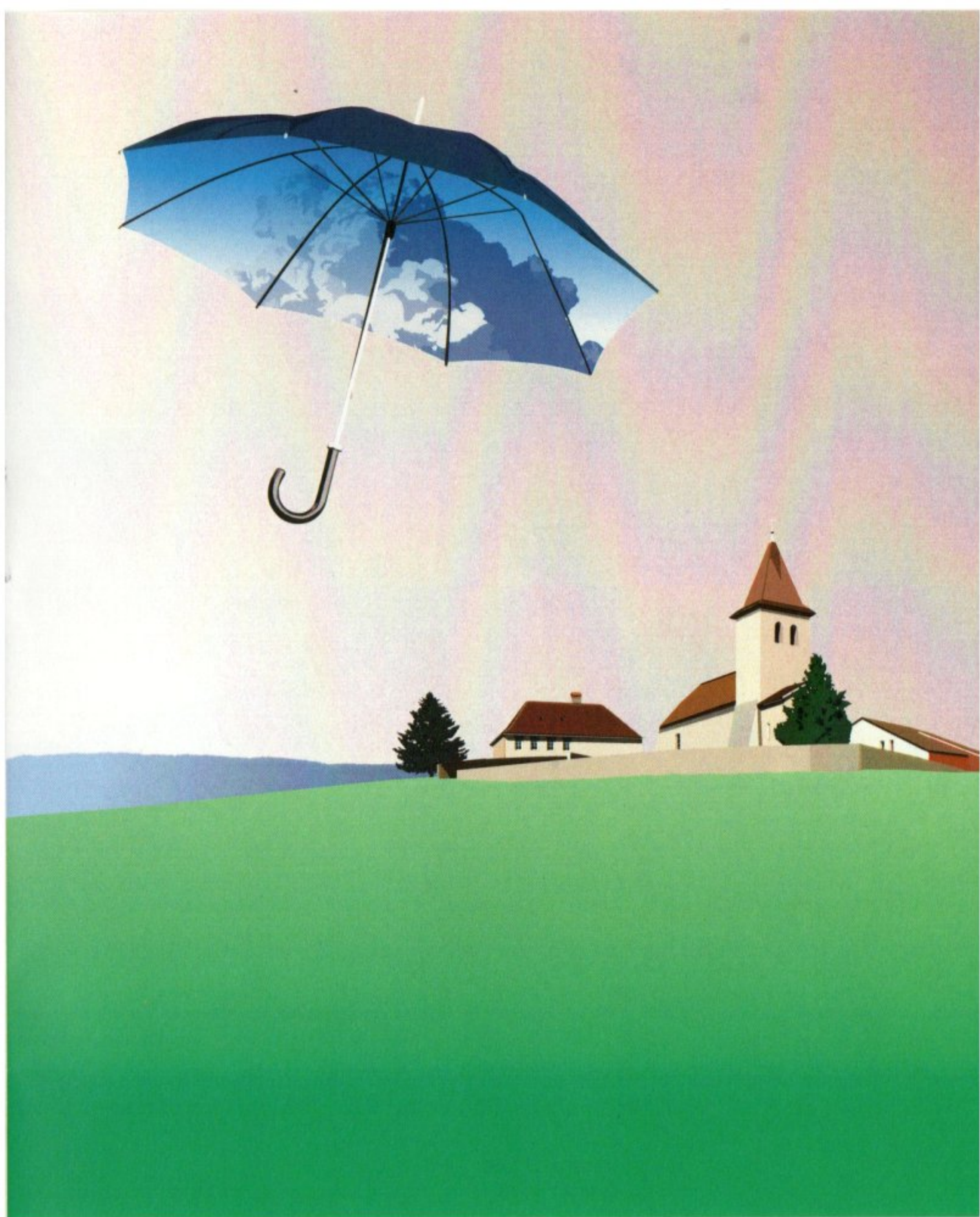
『私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人

のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。』

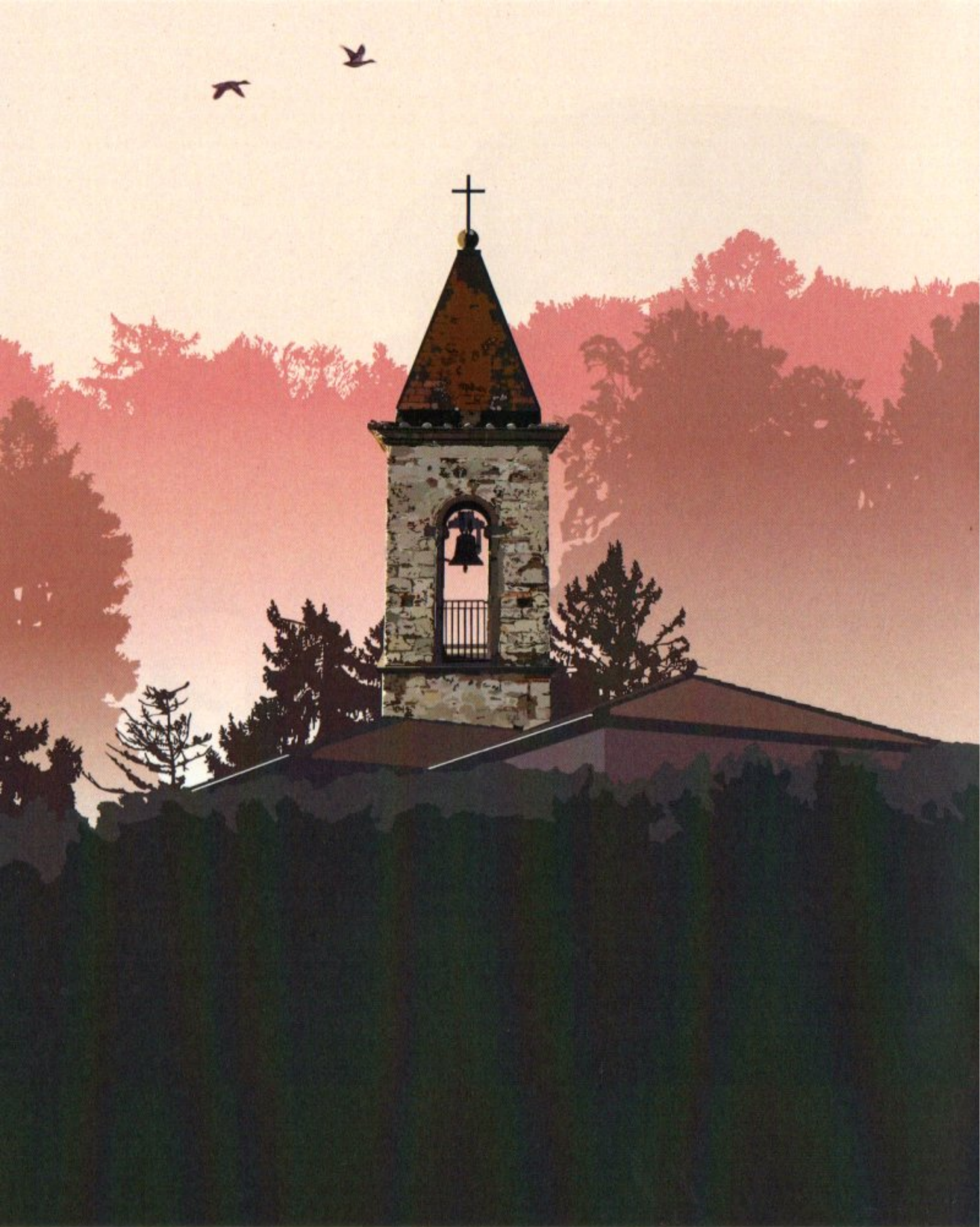
ローマ人への手紙5章6～8節

1982年1月13日16時1分 ワシントンDC
国際空港を飛び立ったエア・フロリダ90便が、
郊外のポトマック川にかかる橋梁に激突し、
墜落しました。原因は、機体に積もっていた
雪の重さで、上昇に必要な速度が得られな
かったためでした。その時遭難した人々を救
助する光景が、リアルタイムで日本のテレビに
映し出されました。激しい吹雪の中、凍った
川から人々を必死になって救助する隊員た
ちの姿に胸を打たれ、祈る思いで見たことを
今も記憶しています。ヘリコプターから浮具の
ついたロープが降ろされ、それを必死になって
つかむ姿に、命の大切さが伝わってきました。

46歳の銀行員アーランド・ウィリアムズさん



も搭乗者の一人でした。ロープが目の前に
降ろされたとき、彼は必死になって凍える手
を伸ばし、上ろうとしました。その時、川の中で
沈みかけている女性に気がつきます。彼はそ
の女性を助けようと、彼女の手をつかみ、先に
ロープをつかませました。その後、もう一人の
女性に気づき、彼女も救い出しました。その女



性の名前はケリー・ダナンさん、飛行機の乗務員でした。彼女が後ろを振り返ると、アーランドさんの姿はなかったそうです。

最後に助けられたケリーさんは翌朝、川辺に引き上げられた何人もの遺体の中にアーランドさんを見つけました。彼の命と引き換えに自分を助けてくれたことを知り、涙が止まら

なかったそうです。

アーランドさんは、ワシントンDCにある教会に通う熱心なクリスチャンでした。その葬儀の折、救助されたケリーさんの言葉が、私の心に今も響きます。「私はアーランドさんに導かれた、最後のクリスチャンです」。事故現場となった橋は『アーランド・ウィリアムズ記念橋』と命名されました。当時の大統領ロナルド・レーガンは、「この人ほど偉大な栄光に値する人物はいない」とアーランドさんの英雄的行為をたたえました。

イエス・キリストは、自らのいのちを十字架の上で投げ出し、私たち一人ひとり、全人類の罪をその身に負われ、救いを受ける道を、私たちに開いてくださいました。ここに、究極的な神の愛があるのです。

私たちの生きる目的、それは私たちを造ってくださった神様と出会い、いのちを投げ出すほど愛してくださるイエス・キリストを信じて、神があなたを造られた目的を知って生きていくことです。

人生の目的



2025年6月1日

定価／165円(本体150+税)

著者／平岡修治

発行／プレイズ

〒441-1361 愛知県新城市平井東長田33-2 TEL.0536-23-6195

<https://praise-jp.com>

※落丁乱丁はお取り替え致します。

Illustrated by Osamu Takimoto

